

「市街地のエッジ」にみる戦前の都市計画思想に関する研究

徳島大学 学生会員 ○片岡志帆 徳島大学大学院 正会員 真田純子
 徳島大学 学生会員 寺嶋茂樹 徳島大学大学院 学生会員 中尾隼人

第1章 序章

背景および目的 東京緑地計画、関東地方大東京地区計画、東京戦災復興計画は、我国における近代都市計画のスタートとなる都市像として発表されたものである。どの計画図を見てみても、何れも緑地帯がクサビ型となっていることに気が付く。しかし、形状の理由については、「本区域の周辺には一定幅員の緑地帯を存置し市街地の連続的膨張を抑制するとともに更にこれより都心部に向ひ楔状の緑地帯を保存して市街地の疎開に役立たしめることにする」と説明されるのみで、なぜクサビ型になったのか、その理由ははっきりとはわかっていない。緑地帯がクサビ型になった理由を探るためには、市街地の縁、つまり「市街地のエッジ」について着目する必要があると考える。そこで、クサビ型緑地帯が登場した背景を知るために、「市街地のエッジ」に着目しながら、当時の専門家たちによる都市計画思想を明らかにすることを本研究の目的とする。

既往研究 戦前の都市計画思想に関する研究は、これまで多数発表されている。「佐野利器の言説にみられる都市計画思想の変遷に関する研究¹⁾」では、建築学者佐野利器の都市および都市計画に関する言説から佐野の都市計画思想および編成過程を明らかとしている。また、「池田宏の都市計画思想 (1)、(2)²⁾」では、都市計画家池田宏に焦点を当て、その都市計画思想の解明を試みている。このように、都市計画思想についての研究は 1 人の人物に焦点を絞ったものが多く、当時の専門家全体の都市計画思想については明らかにされていない。

研究方法 本研究では、「都市計画」をキーワードに国立国会図書館で検索し、その中から戦前に出版された都市計画に関する 39 の書籍をピックアップし、データとした。それらの文献から、専門家たちが当時の都市の状況や都市そのものをどう捉えているのか、また、都市の理想は何かという視点をまとめ、考察する。ここでいう「戦前」とは、1945 年の第二次世界大戦の終戦前までとする。また、「都市」は建物が連担しているところを指し、「市街地」は、一定の人口密度があり建物が連担しているところと定義する。行政区域としての「市」ではないことに注意する。

第2章 専門家による「都市」の理解

この章では、当時の専門家が都市計画に関する著書を執筆するに当たり、当時の都市の状況及び都市そのものをどのように捉えていたか、当時の都市にどのような問題があったと考えていたか理解するためにまとめる。

都市の状況 商工業が盛んになり中心市街地に郊外の農村から都心へと人口が集中し続けたことによって都市人口は密集状態となった、ということが当時の専門家の共通の理解であり、都市とは密集するものとして捉えられていた。

都市の問題 当時の言説を見ていくと、人口について問題としている言説がほとんどであり、市街地の面積的拡大のみを考えている言説は少なく、それが無計画であるということを問題としている場合が多いことがわかる。また、中には都市と自然の分離を問題としている言説もみられることが明らかとなった。

「膨張」の意味 言説を読んでいくと、「都市は発展すべき」というような論調のものが多くに気付くが、39 の言説のうち 20 の言説の中に「膨張」という言葉が登場している。言説中に頻繁にみられるこの「膨張」という言葉は、筆者によって意味が違って使われていることに気付く。その意味に着目して言説をみると、膨張という言葉は、都市の人口集中やそれによって引き起こる密集状態のことを示している場合が多く、20 の言説のうち 12 あることがわかった。また、市街地の面積的拡大のことを指しているものが 3 つ、人口集中・密集と面積的拡大の 2 つの意味を含んだ「膨張」は 5 つ存在することがわかった。中には、「膨張」を「発展」と同じ意味で使っている言説もみられた。

第3章 都市面積拡大という観点からみたそれぞれの言説の分析

ここから、人口集中や密集を都市問題とした専門家たちが何を都市の理想としていたのかについてみていく。都市の理想について書かれている言説は、39の言説のうち27あった。それらを都市周囲の緑地と密接に関係のある市街地の大きさについてみていくと、市街地の面積的拡大について「賛成」「反対」「無関心」の3つに分類できることがわかった。市街地の面積的拡大に賛成とは、現在の市街地の面積を今以上拡大させることに賛成しているものとし、反対派、現在の市街地面積より拡大することに反対しているものとする。また、無関心とは、面積的拡大について言及がないものとする。面積的拡大について無関心の言説を詳しくみると、「市街地のエッジ」について考えているか否かで分けられることがわかった。市街地のエッジを考えているものは、市街地とその外側との位置関係について理想を述べているが、理想とする形になっていればそれでよいとしており、市街地の大きさに付いては特に言及がなかった。市街地のエッジを考えていないものは、施設整備や計画的な住宅整備等をするべきであるという解決方法を述べているものがほとんどで、都市内部の状態について理想を述べているということが明らかとなった。3分類を言説数でみると、「賛成」8、「反対」7に対し、「無関心」は12で、「反対」の言説が少ないことがわかった。

第4章 小都市論の解釈

専門家が都市の理想を語るとき、「田園都市」や「衛星都市」といったものを例に出すことがある。これは、27の言説のうち、10の言説でみられることがわかった。田園都市や衛星都市は本来、小都市論から来ており、都市周囲を緑地帯で囲んで市街地の面積を拡大しないようにすることを基本の考え方としている。この考え方は、市街地の面積的拡大に反対の意見で言及されることは当たり前であるといえるが、面積的拡大について賛成または無関心の言説が小都市の考え方を理想とするのはなぜなのか。ここでは、賛成や無関心の言説が田園都市や衛星都市の都市周囲の緑地帯をどのように理解していたのかについてみていくと以下のことがわかった。緑地帯は、「賛成」の言説では、①都市に自然を近づける役割、「反対」の言説では、①郊外への市街化防止、②都市と自然とをつなぐ役割、「無関心」の言説では、①都市と自然とをつなぐ役割、があると考えている。つまり、当時の専門家にとって緑地帯とは、「市街地の面積的拡大を防止するための非市街地」ではなく、「都市という人工物を自然で囲う」という意味の方が強かったということが明らかとなった。

第5章 結論

当時の専門家たちの言説をまとめると、人口集中・密集を問題と考え、都市は発展するべきであり、市街地と自然を近づける必要があると考えていたということがわかった。これらとクサビ型緑地帯のつながりを考察するために、当時の雑誌記事をみていく。

クサビ型緑地帯とヒトデ型市街地 「緑地計画を中心として大都市の膨張を抑制し、近郊の市町村をして、其の特徴を失はしめざることが最も必要である」、「然しながら大都市を積極的に膨張せしむべしとするのではなく、大都市への人口集中を已むを得ざる現象としての、而して人口集中の防止よりも容易なる方法としての新大都市計画である」という言及から、クサビ型緑地帯は、人口集中の防止よりも容易な方法として、密集圏の周りの緑地の中に計画的な低密度の市街地を少しずつ誘導していく方法を提案しているものであるといえる。

クサビ型緑地帯に関する推測 当時の都市計画に関する書籍とクサビ型緑地帯の雑誌記事からわかったことは、当時の専門家たちは市街地の面積的拡大ではなく、都市を発展させることに興味を持っており、その発展により人口の集中・密集を緩和し、市街地の形状を統制していくことが必要だと考えていることであつた。また、クサビ型緑地帯が市街地と自然とをできるだけ近づけるために設けると考えていることも明らかとなった。つまり、都市が発展することで人口集中・密集が緩和され、市街地と自然とをできるだけ近づけることができるというこの3つの点で、クサビ型緑地帯は考案されたのではないかと推測できる。

¹ 2006 竹内孝治、小川英明『佐野利器の言説にみられる都市計画思想の変遷に関する研究』日本建築学会東海支部研究報告集

² 1996 河瀬雄司、田路貴治『池田宏の都市計画思想 (1)』日本建築学会近畿支部研究報告集、『池田宏の都市計画思想 (2)』日本建築学会大会学術講演梗概集